

## 青年期女子における醜形恐怖心性とその関連要因に関する研究

大村 美菜子

### 要約

近年、自分の容姿にとらわれる醜形恐怖症という病態が注目を集めているが、健常者においても、容姿にこだわりをもつ若者が増えてきている。しかし、健常者における容姿に対するこだわりと醜形恐怖症との関連については、未だ実証的な研究が十分になされていない。そこで本研究では両者の関連について検討するうえで重要となる、健常者の醜形恐怖に関わる心理的事象について検討する。

第1章では、醜形恐怖症の基礎となる資料として健常者の容姿へのこだわりを検討する必要性を述べ、健常者の容姿へのこだわりを「醜形恐怖心性」として、その定義について論じた。

第2章では、醜形恐怖心性を抱くものが増加傾向にあることや、醜形恐怖心性が女性に多いこと、さらに醜形恐怖心性の影響要因についての研究動向を述べた。それらを踏まえ、以下の目的を設定した。青年期女子における容姿に対する可変性の認知および身体満足感を検討し、青年期女子の醜形恐怖心性に関する研究のための基礎的な資料を得ることを第一の目的とした。基礎的な資料を踏まえ、健常者における容姿に対する強いこだわりである醜形恐怖心性を測定する尺度を作成し、醜形恐怖心性と承認欲求および身体満足感との関連について検討することを第二の目的とした。

第3章では、身体部位の可変性が青年期の容姿へのこだわりに関連することを考慮し、個々の身体部位をどの程度、可変性があると認知しているのかについて男女の違いを検討した。その結果、男女で可変性があると認知している身体部位が異なることが明らかになった。さらに青年期男子に比べ青年期女子の方が、より個々の身体部位を可変性が低いものと認知していることも明らかになった。

そこで、個々の身体部位の改善の手段や方法について、青年期女子を対象として自由記述で回答を求め、個々の身体部位の可変性に対する青年期女子の認識について調査を実施した。その結果、「髪」はヘアスタイルチェンジという方法で、「目」や「肌」は化粧などの方法で変えられるという回答が多かったのに対し、「上半身」「下半身」とくに「顔の造り」はダイエットや整形をしない限り簡単には変えられないという回答が多く見られた。金本ら（1999）の女子大学生が下腹部という即時に変えることが困難な身体部位に強い不満足感を持っているという指摘があり、今回の結果からは、青年期女子において下腹部のみならず、「上半身」「下半身」とくに「顔の造り」に対して不満足感を抱く可能性が示唆された。

第4章では、身体部位の可変性と身体満足感の関連を考慮し、青年期女子における個々の身体部位に対する可変性の認知と身体満足感との間にどのような関連がみられるかを検討した。その結果、可変性の認知と身体満足感との間に最も関連が見られた身体部位は「肌」のみであり、「髪」「鼻・口」に関しては弱い関連しか見られなかった。このことから、身体部位によっては身体可変性の認知と身体満足感との間に関連がみられることが明らかになった。

第5章では、身体満足感と自己評価や他者からの評価との関連を調べるために、青年期女子において身体満足感が自尊感情を高め、自尊感情が高まることによってシャイネスが低下することを踏まえ、青年期女子の身体満足感を部位ごとに測定し、身体の各部位に対する満足感が自尊感情を媒介してシャイネスにどのような影響を及ぼすかについて探索的に検討した。その結果、「肌」への満足感のみが自尊感情やシャイネスに影響を及ぼし、他の4部位は自尊感情やシャイネスに影響を及ぼさなかった。

これらの研究結果から、青年期女子において身体の可変性や身体満足感が容姿へのこだわりと密接に関連していることがわかり、青年期女子の容姿へのこだわりと醜形恐怖という病理の関連を実証的に研究し、この分野の研究を発展させるためには、調査ツールとしての醜形恐怖心性を測定する尺度開発が必要と考えた。

第6章では醜形恐怖心性尺度の作成を試みた。具体的には、「容姿に対する評価懸念」と、「容姿に対する関心集中」の2つの下位因子からなる計9項目の醜形恐怖心性尺度を作成した。その結果、同尺度は、十分な信頼性、および収束的妥当性、弁別的妥当性、併存的妥当性が確認され、健常者における容姿に対する強いこだわりを測定するための適切な尺度が確認された。

第7章では、第6章で作成した醜形恐怖心性尺度を用いて、青年期女子における醜形恐怖心性と個々の身体部位に対する満足感との関連を検討することを試みた。その結果、醜形恐怖心性とすべての身体部位に対する満足感との間に関連があることが明らかになった。一方、醜形恐怖心性の下位因子である「容姿に対する評価懸念」と「容姿に対する関心集中」においては、個々の身体部位に対する満足感との関連に違い見られた。「容姿に対する評価懸念」においては、「肌」に対する満足感と醜形恐怖心性との間に関連が認められたのに対し、「容姿に対する関心集中」においては「肌」に対する満足感と醜形恐怖心性との間に関連が認められなかった。このことから、他者の評価を懸念して容姿にこだわりを示した場合にのみ、肌に対する不満足感を感じるようになった。

第8章では、青年期女子における醜形恐怖心性の背景に、人から認められたいという欲求が存在する可能性が考えられたため、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が、醜形恐怖心性尺度の下位因子である「容姿に対する評価懸念」、「容姿に対する関心集中」に及ぼす影響について検討した。その際、承認欲求と自己志向的完全主義との関連や、醜形恐怖と完全主義との関連についての先行研究から、醜形恐怖心性に、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が影響を及ぼす際、完全主義を媒介していることが予測されたため、自己志向的完全主義を媒介変数とした。その結果、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が強いと、「容姿に対する評価懸念」、「容姿に対する関心集中」が強くなることが示された。さらに、賞賛獲得欲求の強さが自己志向的完全主義を強め、「容姿に対する評価懸念」を減らすことも示された。

第9章では、青年期女子の容姿に対する強いこだわりと容姿の美醜に対する不安と恐怖心が、身体への満足感や他者からの承認欲求という自己評価や対人心理と密接に関連していることが明らかとなったことについて考察し、容姿に対する強いこだわりと精神的適応との関連をさらに深く理解するために、自己の容姿の美醜に対する心性を測定するための客

観的手法となる醜形恐怖心性尺度を開発したことについてのべた。また、今後の課題についても記載した。

(公刊:大村美菜子 (2015)「青年期女子における醜形恐怖心性とその関連要因」. 風間書房.)